子どもと築く、未来のしくみ

Plan
プラン・ジャパン

プラン・マンスリー・サポーター報告書

Spring 2014

2013年1月 ⟶ 2013年12月

発行：公益財団法人プラン・ジャパン

紛争や災害に巻き込まれる子どもたち

武力紛争下の国や地域に暮らす子どもは10億人以上（※）。命を落とし、親を失い、戦闘や強制労働に駆りだされています。また、近年の記録的な大雨や台風、干ばつなども、子どもたちの生活や教育に打撃を与えています。

※ UNICEF, 2009

カンボジア「学校給食を通した子どもの栄養改善」

実施地域●シェムリアップ州、バッタンバン州、カンポントム州、オドーミンチェイ州
実施期間●2013年10月～2015年9月
対象●対象校1,064校に通う全生徒、教師、生徒の家族をはじめとした地域住民

朝食を食べて元気に学ぶ、それが就学率アップの第一歩

背景

1970年代のポル・ポト政権下に医師や教師など知識層の多くを喪失したカンボジアでは、基本的栄養知識を持つ成人が少なく、いまだ子どもの多くが栄養不良の状態です。登校しても空腹で授業に集中できないため、成績不振で落第し、その結果退学する児童が後を絶ちません。

給食は7時から。生徒たちは各々食器をもって並びます

今期の主な活動

- 連携する国連世界食糧計画（WFP）との契約
- 対象校、対象世帯の特定
- スタッフの採用、配置
- 給食導入、対象世帯への米、奨学金支給

対象地域や活動内容について、国連世界食糧計画（以下WFP）、政府との長期にわたる協議を経て2013年10月契約を結び、ようやく活動を開始しました。

今期の大きな活動は対象の学校での給食導入と食糧・奨学金を支給する世帯の決定です。給食は対象地域のすべての学校で授業のある10～7月の月～金曜の朝、授業の前に支給します。メニューは、豆入りごはんと野菜とイワシのスープ。食糧・奨学金は世帯収入や世帯主（女性、高齢者、障がい者など）が選定基準です。WFPは給食に使う食材（米、豆、植物油、食塩、イワシ缶詰の5種）と調理道具、支給用の米と奨学金を提供。プランはそれを受けて学校で調理や食糧の在庫管理の指導や各校を定期的に訪問・モニタリングを行います。学校菜園や衛生指導など、給食を支える活動も準備段階にあります。

Field Report | 山形文 職員（プログラム部）

ポル・ポト時代の負の遺産は今も

2013年12月、WFPや地方行政との協議や対象地域と対象校の視察、調整のためシェムリアップへ出張しました。現地スタッフと給食を視察、管理体制を確認し、学校管理者から話を聞きました。

給食係の児童が6時半から準備をし、7時前から配膳、7時半には授業開始、というシステムがしっかり機能していました。当初、食べ慣れなかった豆も、調理人の工夫で豆ごはんにしてからは人気のメニューになっているそうです。十分な栄養を摂り、元気で授業に臨む児童の変化に教師は活動の効果を実感。児童の親にとっても給食は子どもを学校に送り出す動機のひとつとなっています。小学校の中途退学対策に悩む州教育スポーツ省とのミーティングでは、児童の登校意欲や授業での学習効率の向上に効果的であると、この活動に大きな期待が寄せられているのを感じました。

今はのどかな田園風景が広がっていますが、わずか30数年前この地ではポル・ポト政権によって教師を含む知識層の多くが殺されました。業務の合間に同僚がしてくれた話です。「当時私は小学生。先生がいなくなり、授業がなくなった。家族と別々に収容所に入れられ、何年も労働を強いられた。その間に親もきょうだいもなくした。紛争が終わっても知識人がみな殺されていたから学校も病院もすぐには復旧できなかった。人材の回復には一世代分の時間が必要。この国はまだまだ負の遺産を抱えているんだよ」。この活動を通して初等教育を修了できる児童がひとりでも増えることを願わずにいられません。

アンコールトム郡ワトラン小学校で。山形職員は中央

南スーダン「若者への就職・起業支援」

実施地域●中央エクアトリア州ラニャ郡、ジョングレイ州ボー郡
実施期間●2012年7月～2016年6月
対象●15～35歳の若者　約1,200人および教師など

若者の生計向上を通じて新しい国づくりを後押し

背景

南スーダンは2011年に独立を果たしたものの、長年にわたる内戦の影響で若者は十分な教育を受けていません。大多数の若者にとって就職は困難で、失業による貧困が犯罪を増加させています。本プロジェクトは雨季の洪水などの影響を受けましたが、活動は軌道に乗り始めています。

若者の職業訓練所への登録を呼びかける

今期の主な活動

- 職業訓練所の整備とカリキュラム作り
- 関係者の能力強化（60人）、関係機関との連携
- 若者のための職業・起業訓練説明会（242人）
- 職業訓練生の登録（593人）と訓練（261人）

前期に行った市場調査に基づいて職業訓練のカリキュラムを作成し、教官や職業訓練所スタッフの能力強化を実施。2郡の訓練所の整備も完了しました。若者を訓練所に登録させるために説明会を開催するとともに、地元のラジオ局や、自宅訪問を通じて呼びかけを行いました。登録された若者には、まず基本的な読み書きや計算を教え、その後、市場のニーズに基づいて、自動車整備工、電気配線工、服飾、農業、畜産、養蜂、皮革などに関するトレーニングを実施しました。起業を目指す若者には、ローンのための預金貸付組合の利用法についても指導しています。

さらに地域住民も協力し、訓練用の中古車や、訓練生のための食事、訓練所の修繕費用などを拠出しています。行政もプロジェクトのモニタリング活動を通じて次年度の活動計画作りを主導するなど、関係者が一体となって若者の生計向上を支援しています。

Case Study　メアリーさん、ロナさん

内戦下の荒廃した環境で、手に職をつけて自立する女性たち

メアリーさんは、ラニャ郡の最も貧しい村で暮らしています。内戦の影響から、村では早すぎる結婚、アルコール中毒が日常化し、レイプ事件もときどき発生するそうです。学校までは遠く、教育にお金をかける余裕もないので、若者の98％は教育を受けていません。彼らが生きていくためには手に職をつける必要があります。メアリーさんは、地域リーダーや聖職者に、「村の若者たちにカード遊びばかりしていないで、将来のために無料の職業訓練を受けるよう、メッセージを送ってほしい」と訴えています。

ロナさん（23歳、女性）は、小学校を6年で中途退学せざるを得ず、十分な教育を受けることができませんでした。同年代の無職の男性と知り合い、レイプされ、妊娠させられる被害にもあいました。その後、本プロジェクトのことを知り、急いで職業訓練所に登録。洋服仕立業の訓練を受け始め、今では一人でドレスを作ることができるようになりました。ロナさんは経済的に自立するためのスキルを身につけたことで自信が持てるようになり、訓練所を卒業した後の就職を心待ちにしています。

本プロジェクトは、インドで開発され、さまざまな途上国で展開されている就業・起業訓練モデル“BEST”を採用。職業訓練のカリキュラム作りには雇用者側も参加し、実際の市場ニーズに基づいた技能を身につけることができます。訓練所卒業者とのネットワークもあり、卒業後のスムーズな就職、起業が可能です。次年度も若者の職業訓練の機会を広げるための支援を継続していく予定です。

服飾のトレーニングの様子

スリランカ「子どもの保護とケア及び地域社会への復帰支援」

実施地域●東部州バッティカロア県
実施期間●2012 年 12 月～ 2015 年 12 月
対象●紛争の影響を受けた子ども　約 2 万 6,000 人

地域ボランティアの献身的な活動が、内戦の影響を受けた子どもを守る

背景

スリランカでは、約 30 年にわたる内戦が人々の暮らしに重大な影響を及ぼしました。特に東部州での戦闘は激しく、紛争に巻き込まれた子どもたちは保護者を失い、教育の機会を奪われました。また、貧困により、暴力、性的搾取、虐待などのターゲットになりがちです。

各世帯を回って子どもの状況を確認します

今期の主な活動

●関係者の能力強化（のべ 2,433 人）
●子どもの保護とケア、教育再開支援
●意識啓発　●関係機関との連携

1 年目の今期は、行政官、医療専門家、地域ボランティア、保護者や、子どもの保護施設・学校・警察・宗教団体関係者などの能力強化と連携を図りました。地域ボランティアが各世帯を回って状況を調査し、親が海外で出稼ぎ中、片親、学校を中途退学した子どもがいる世帯などで、計 3,429 人の子どもが暴力、性的搾取、虐待などに巻き込まれる危険性があることが判明。保護者や地域住民に意識啓発を行い、問題発生の防止に努めました。

12 ～ 18 歳の子どもを対象に、自分で身を守る手段について啓発セッションを行いました。また、中途退学して児童労働や家事に従事させられていた子どもや、早すぎる結婚の被害にあった子どもには、教育再開支援（中途退学から 1 年以内のケース）もしくは職業訓練支援（14 歳以上で、中途退学から 1 年以上のケース）を行い、地域社会への復帰を進めました。これまでに 84 人の子どもが学校に戻り、46 人の子どもが職業訓練を受けています。

Case Study　カライヴァニさん（23 歳、女性）

内戦後にボランティア活動を通して取り戻した生きがい

内戦下で生きてきたカライヴァニさんの子どもの頃の記憶は、辛いものばかりです。貧困で小学校を中途退学せざるを得ず、将来に何の希望ももてずに家に引きこもり、生きていくことの意味にさえ疑問を感じていました。

そんなある日、プランの職員が彼女の村で集会を開き、「内戦の影響を受けた子どもたちの支援を始めるので、ボランティアとして参加して欲しい」と訴えました。いつも自分の不幸だけを嘆いていた彼女は、子どもたちを支援することで自分自身も何か変わるように感じ、ボランティア活動を開始。その後、7 歳の男の子で小学 2 年生のラジェンドランさんに出会います。彼の父親は、彼が生まれた直後に内戦に巻き込まれて死亡。母親は大変な苦労をしながら、残された家族の面倒を見てきました。

ラジェンドランさんは定期的に登校していなかったので、カライヴァニさんは、彼の将来のために最低でも中学校まで教育を受けさせるよう母親に訴え、ラジェンドランさんにも、学校で勉強するよう説得し続けました。また、彼と母親を伴って学校に行き、校長や担任の先生に、彼への特別な配慮とケアをお願いしました。

今では、ラジェンドランさんは毎日登校し、学校生活を楽しんでいます。登校前には必ずカライヴァニさん宅を訪れ、「これから学校に行って来ます！」と言ってから出かけ、帰宅後には彼女に宿題を見てもらっています。カライヴァニさんは今では、子どもの未来のために自分の時間をささげることは幸福であり、価値のあることと思っています。

制服と教材の支給を受けて学校に戻ります

世界で５～17 歳の２億 1,500 万人が労働に従事し、健全な発育や教育の機会を奪われています（※）。強制労働、債務労働、子ども兵士、人身売買、子ども買春・ポルノなど、その形態は悪質化しています。

※ ILO,2010

エジプト「ストリート・チルドレン」

実施地域●北部アレクサンドリア
実施期間●2009年10月から2016年６月
対象●ストリート・チルドレン　約 5,000 人など

路上から社会参画を目指す子どものエンパワーメント

背景

エジプト都市部で増えるストリート・チルドレン。背景には貧困や家庭の崩壊、虐待、都市への流入、勉強の遅れ等があります。実施４年目の本プロジェクトは子どもたちへの保健・カウンセリング、教育、職業訓練、社会復帰の支援、ストリート・マザーへの支援も行いました。

保護施設で一緒に勉強する子どもたち

今期の主な活動

- ストリート・チルドレンの保護や一時的なサービス提供（約 3,000人）
- 医療保健支援（544 人）　●ストリート・マザーへの支援（66人）
- 出生登録や裁判などの法的支援（103人）　●母親を対象とした啓発トレーニング（40人）
- 預金貸付協同組合の運営（100人）　●職業訓練（59人）
- 元ストリート・チルドレンへの職業訓練や生活支援（129人）
- 非公式教育の機会提供（103 人）　●ソーシャルワーカーのトレーニング（20 人）

プロジェクト中盤のこの１年は、拡大した活動、継続的に行ってきた活動、ともに順調に進みました。保健医療支援では新しい医療機器による検査や治療が可能になり、症例に応じて専門的な医師と看護師による質の高い治療を実施。

また、新たにストリート・マザーの支援も始めました。ストリート・チルドレンの女の子が性的虐待を受けて妊娠・出産、母子ともに路上生活を余儀なくされるケースが多く、貧困と無防備さゆえの悪循環が存在しています。こうした女性に、身体についての知識や法的権利を教え、職業訓練を行いました。さらに予防策として、貧困地域の母親たちに育児や生計向上のアドバイスを行い、子どもが路上に出た場合の危険について説明。また、ストリート・チルドレンが得た収入を預金貸付協同組合に貯蓄して、新しい商売を始めることも可能になりました。

Case Study　ゴマさん（19歳、男性）、ムハンマドさん

家庭内不和も、ストリート・チルドレンになる理由の一つ

ストリート・チルドレンになる理由は子ども一人ひとり異なりますが、家庭内不和も大きな原因の一つです。

2013 年に路上生活を終え、家族のもとに戻ったゴマさんの場合は、継母の虐待が原因でした。母親が亡くなり、しばらくは大工の父親と２人暮らしでしたが、父親が再婚。経済的に厳しい中で、継母がゴマさんに辛く当たるようになり、耐えられなくなったゴマさんは、家を出て路上で暮らすように。

やがてゴマさんはこのプロジェクトで支援を受け、職業を得るまでのスキルを身に付けました。プロジェクトのカウンセラーが父とゴマさんと話し合い、家族の中で幸せに暮らせるようにゴマさんを守ることを誓約したところ、ゴマさんも父や家族の力になることを承諾、家族のもとに帰りました。現在もプロジェクト・チームがゴマさんの家庭を訪問し、幸せに暮らしているか定期的に確認しています。

また、ストリート・チルドレンは犯罪に巻き込まれやすく、冤罪被害者にもなりやすい傾向にあります。ムハンマドさんはストリート・チルドレンのリーダー的存在でしたが、警察の目につきやすかったのか、身に覚えのない犯罪で逮捕されました。そのため、このプロジェクトの法律チームが弁護を担当。裁判では、弁護士は、ムハンマドさんの逮捕は恣意的なもので、ストリート・チルドレンへの偏見や差別によるとして、法の下の平等と無実を主張、見事に勝訴しました。

子どもを路上に送らないための、親に向けた研修

世界中に約 9500 万人と推定される障がいのある子どもたち（0 ～ 14 歳）（※）。基本的な医療や社会サービスが不足しているため、適切な治療やケアを受けられず、周囲の無理解から、差別や虐待にあいやすいことも問題です。

※WHO、2011

トーゴ「障がいのある子どもたちの支援体制作り」

実施地域●中部チャオウジョ県、ビリッタ県、東モノ県の計 24 村
実施期間●2011 年 8 月～2016 年 6 月
対象●障がいのある子ども約2,000 人と地域住民、保健・教育・社会福祉分野の職員

地域住民の能力強化を通じ、障がいのある子どもたちへの支援体制を構築

背景

トーゴでは、人口の約 10%をしめる障がい者のうち、必要なケアを受けているのは約 2%。多くの社会サービスが有料で都市部に集中しているためです。本プロジェクトでは、地域住民が主体となった、障がいのある子どもの保健、教育、就業等の支援体制づくりを推進します。

サマーキャンプでゲームを通じて学ぶ子どもたち

今期の主な活動

- ●地域ボランティアの育成（56人）
- ●トレーニング実施 医療従事者（60人）、伝統医療従事者（77人）、教育関係者（105人）、子どもクラブ（480人）、職業訓練の指導者となる職人（118人）
- ●地域住民への意識啓発活動（4万195人）
- ●障がいのある子どもの診断・理学療法・機能回復訓練（1,891人）
- ●学用品の提供（870人）●障がいのある子どもへの職業訓練（142人）

これまでに多くの障がいのある子どもを発見し、適切な診断・治療を行ってきました。中盤のいま、対象地域における支援体制ができあがりつつあります。しかし、いまだ障がい者への差別や偏見が根強く残るため、継続的な意識啓発が最も重要です。活動の中核となる地域ボランティアには、対象児童への心のケアや、症状に合わせた治療について専門的な知識を提供。教育関係者たちには、障がいのある子を学校で受け入れる「インクルージョン教育」を訓練しました。

もうひとつの重要な取り組みが、障がいのある子どもとない子どもで成立つ、「子どもクラブ」のトレーニングです。障がいのある子どもの権利や、差別や偏見をなくすために自分たちができることについて話し合い、サマーキャンプも実施。今後、子どもたちが主体性を持ち、障がいのある子どもたちを支える体制ができました。

Case Study | A.S. さん（13 歳の男の子）

適切な治療で視力が回復！ 学校に通えるようになりました

A.S. さんは、生まれながらに目に障がいのある男の子です。家庭は貧しく、障がいに対する両親の理解もなかったため、適切な診断・治療を受けることができませんでした。学校にも行けず、友だちもできずに、孤独でさびしい日々を送っていました。

2012 年 6 月のある日、プランの地域ボランティアが A.S. さんの家を訪問し、彼の目の障がいを発見しました。そして、その後、眼科医によって初めて適切な診察が行われたのです。新学期に向け、再び A.S. さんの家を訪問した地域ボランティアは、A.S. さんを学校に通わせるよう両親を説得しました。その結果、A.S. さんは、目に障がいのある人のための治療センターで、点字を用いて勉強ができるようになりました。

2012 年 10 月になると、A.S. さんは、とうとう地域の学校に通い始めることができました。友だちもでき、点字を用いて、いくつか文字も書けるようになりました。そして現在、手術を受けた A.S. さんの視力は回復しました！ A.S. さんは、目の前に広がる新しい世界を見つめ、充実した日々を送っています。

医療機関で検査・治療を受ける A.S. さん

A.S. さんの障がいの発見から適切な診断・治療、そして地域の啓発活動まで、プランのスタッフと地域の人々が連携し、包括的な支援を行った成果です。

虐待の実態を把握することは困難ですが、毎年５億人から15億人の子どもが経験していると推定されています（※）。身体・心理的虐待、育児放棄、強制労働や性的搾取を目的とした人身売買など、その内容もさまざまです。

※ UNICEF, 2009

スリランカ「家庭・学校・地域での暴力防止」

実施地域●北西部アヌラダプラ、クルネガーラ、中部ヌワラエリヤ、マタレ、南東部ウェーラワーヤ、モナラガーラ
実施期間●2011年８月～2014年12月　対象●子ども約3,900人および保護者・教師など約5,900人

行政と地域住民の緊密な連携で子どもの保護活動を推進

背景

スリランカでは、長年にわたる紛争、海外出稼ぎによる親の不在、無計画な近代化により、子どもへの暴力や性的虐待が増加傾向にあります。こうした暴力は子どもの適応障害だけでなく、社会に暴力の連鎖を生む要因ともなっています。

学校で啓発活動を行う子どもグループ

今期の主な活動

●関係者の能力強化（のべ5,693人）
●子どもへの意識啓発（のべ1万77人）　●子どもグループ活動
●子どもの保護活動
●関係機関との連携

３年目の今期は、引き続き地域ボランティア、学校教師、保護者、行政官、警察官などを対象に復習のためのトレーニングを実施。成功事例を共有して子どもの保護活動の質の向上に役立て、関係者間の連携を深めました。地域ボランティアも以前は受身でしたが、復習のトレーニング後は積極的に社会サービスへのアクセスがない子どもや、虐待の恐れのある子どもを持つ世帯をすばやく見つけ、通報できるようになりました。出生証明書の発行を行政に働きかける支援も行っています。

男性の保護者も、啓発セッションを通じて、虐待の引き金となる喫煙、飲酒、薬物依存などの習慣を改めはじめています。子どもたちも、見知らぬ大人から接触を受けた時には強く拒絶し通報する、外出時には必ず家族に行き先を告げるなどの習慣を徹底しています。また、地域や学校で子どもたちによるグループを作り、住民や教師に子どもの保護を訴える啓発を行っています。

Case Study　ウイーラコーンさん、バンドゥラさん

ボランティアをトレーニングで育て、ネットワーク作りを

ウイーラコーンさん（男性、22歳の小学校教師）は、プロジェクトへの参加は有益だったと言います。「私がこのプロジェクトに子どもたちと一緒に参加するよう誘われたとき、実はあまり気乗りがしなかったのです。同様のトレーニングにこれまでに何度も参加したことがあるのですが、結局どれも役に立たなかったからです。ところが、プランのトレーニングに参加して目からうろこが落ちました。“なぜ、子どもの虐待が起こるのか”、“大人として、教師として、子どもの虐待防止のために何ができるのか”、“保護者の役割とは何か”など、これまで学べなかったことばかりでした。早すぎる妊娠や性的虐待の防止に関する啓発ビデオもとても役に立ちました」。

バンドゥラさん（男性、児童・女性問題省の子どもの保護担当官）も、プロジェクトの効果を次のように話してくれました。「これまで子どもの保護対策が思うように進まなかったのですが、プランが協力してくれたおかげで、地域ボランティアにトレーニングを行うことができました。彼らは、私たちの政策を推進してくれる地域の代表です。私たちはチームとして、それぞれの役割、子どもの特性、子どもの保護対策、緊急時のネットワーク体制などについて話し合い、問題解決に向けて連携しています。今では、村で問題が発生した際には、迅速に連絡してくれるようになりました」。

プロジェクトの成功には、関係者の問題解決に向けた態度と行動の変化、関係者間の連携が不可欠です。これを実践できていることが、このプロジェクトの強みです。

シンプルで分かりやすい啓発メッセージが、子どもたちを犯罪から守ります

HIVとエイズに苦しむ子どもたち

HIV に感染した 15 歳未満の子どもは、世界に約 340 万人。年間 25 万人の子どもがエイズ関連の病気で命を落としています（※）。母子感染や、エイズで親を失った子どもたちの保護も大きな課題です。

※ WHO/UNAIDS/UNICEF,2011

インド「子どもと女性を中心としたHIV予防とケア」

実施地域●北部ウッタラ・プラデシュ州マウー県、東部オリッサ州ガンジャム県、西部マハラシュートラ州プネー県
実施期間●2009 年 10 月～2016 年 6 月（2012 年 10 月よりフェーズ 2 開始）
対象●青少年約 2 万 2000 人、妊産婦約 15 万人など

生まれてくる子どもたちへのHIV母子感染をなくすために

背景

インドの HIV 陽性者は約 250 万人、毎年 10万人の HIV 陽性の女性が出産します。その 3 割が母子感染し、毎年、約 1,400 人の 15 歳未満の子どもがエイズ関連の病気で死亡する中、HIV 母子感染予防、HIV 陽性者へのケア・治療、予防教育・意識啓発活動、法律相談などが必要とされています。

女性を対象にした啓発活動

今期の主な活動

- ●妊産婦（4万7,259 人）と配偶者（6,054 人）への HIV 検査
- ●HIV陽性者への心理社会的ケアと治療　●HIV 陽性の乳幼児への栄養治療（230人）
- ●青少年への HIV 予防教育（1万5,052 人）　●学校での HIV 予防教育（46校）
- ●地域ボランティアの養成（600人）　● 地域の行政管やリーダーへの意識啓発活動

2012 年10月から開始したフェーズ 2（3 年間）の活動 1 年目が終了しました。

今期は、HIV 母子感染を予防するため、包括的な地域対策を実施しました。まず、HIV とエイズについて正しい知識を広めるべく、助産師やヘルスワーカーと連携し、妊産婦や妊娠の可能性が高い女性や配偶者を指導。産前の HIV 検査の重要性を説き、治療により健康な生活ができること、乳児への感染を予防できることを周知した結果、多くの人々が検査を受けました。医療機関と連携し、HIV 陽性者には、適切な治療を提供。陽性の母親には栄養管理指導を、乳幼児には栄養治療を実施しました。

青少年への予防教育として、教師に性教育トレーニングを行い、若者が結婚・妊娠前に正しい知識を得て、自分や未来のわが子の感染を防ぐことを目指しています。住民の意識啓発を担う地域ボランティアも養成しました。

Case Study　ロジャリンさん（仮名・HIV陽性の子どもの母親）

サイクロンの暴風雨の中誕生した新しい命

ロジャリン（仮名）さんは、夫と子どもの 3 人で、ガンジャム県に暮らしています。プランのスタッフが彼女に会った時、第 2 子を妊娠中でした。スタッフの勧めで、夫婦で HIV 検査を受けたところ、結果は 2 人とも HIV 陽性。夫婦は中絶さえも頭をよぎったそうです。しかし、生まれてくる子の HIV 感染を予防できることを理解し、出産を決意。プランのスタッフのカウンセリングと励ましを受け、希望を見出しました。

出産予定日の 2013 年 10 月 31 日に向け、母子感染予防薬の予約・手配が行われました。しかし、巨大サイクロン「ファイリン」による暴風雨が発生した 10 月 11 日の夜、ロジャリンさんの陣痛が始まりました。暗闇の風雨の中、スタッフたちは懸命に保健所まで搬送しましたが、たどり着いた保健所は台風によって混乱。小児科医が駆けつけましたが、スタッフの尽力にもかかわらず、必要な予防薬を手配できませんでした。

10 月 13 日の夜中 1 時、ロジャリンさんは無事出産！　健康な赤ちゃんを見てロジャリンさんは幸せでした。夜が明け、サイクロンの被害で最悪の道路状況の中、プロジェクトスタッフが奔走し、他の医療機関から予防薬を入手。何とかロジャリンさんの赤ちゃんにタイムリーに予防薬を投与することができました。

出産後のロジャリンさんと赤ちゃんを訪問するプランスタッフ

出産から数カ月後、赤ちゃんが HIV に感染していないことが分かりました。ロジャリンさんとプランのスタッフは、サイクロンの最中に生まれてきた赤ちゃんの無事を、心から喜んでいます。

カメルーン「子どもと女性を中心としたHIV予防とケア」

実施地域●中部アダマワ州、北西州
実施期間●2012年9月～2016年6月
対象●妊産婦・出産が可能な年齢の女性約7万2,000人、子ども約1万2,000人

情報通信技術と地道な訪問活動でHIV母子感染の予防対策を推進

背景

カメルーンでHIVとともに生きる妊産婦は3万4,000人、14歳以下の子どもは5万4,000人です。妊産婦の多くはHIV検査や母子感染予防サービスを受けていません。本プロジェクトは、雨季の洪水の影響などで開始が遅れていましたが、2013年1月にスタートしました。

携帯電話でメッセージを確認する女性

今期の主な活動

●地域保健員（56人）・地域ボランティア（のべ1,268人）の能力強化
●ショートメッセージサービス（SMS）による産前健診の連絡（妊産婦1,342人に計1,857通）
●地域巡回活動による妊産婦の発見、意識啓発キャンペーン（計557回、12万4,309人参加）
●医療機器・備品、HIV検査キットの支給　●関係機関との連携

プロジェクト1年目の今年は、HIV母子感染予防およびHIV感染者へのカウンセリングやケアに関するトレーニングを受けた地域保健員が、母子保健サービスを開始。携帯電話のSMSやHIV感染予防について学んだ地域ボランティアは、SMSを通じて妊産婦に次回の健診日を伝え、受診できなかった妊産婦には再度、受診を促すメッセージを送りました。彼らは自宅訪問や地域の意識啓発キャンペーンを通じて産前健診やHIV検査の重要性を説明、母子保健サービスの利用を促しています。以上の活動により、妊産婦6,940人が1回目の産前健診を受け、うち5,627人（81%）がHIV検査を受けました。

保健ボランティアの約30%を占める男性も、意識啓発によってHIVとエイズに対する偏見を取り除き、産前健診とHIV検査、HIV陽性者への投薬治療を推進する担い手として活躍しています。

Case Study | 内山雄太 職員（プログラム部）

母子感染を最前線で食い止める、SMSと訪問活動の融合

SMSで送信するメッセージは、次のようなものです。「○○さん、1回目の産前健診、お疲れ様でした。2回目の健診は△月△日にXX保健所で行いますから、忘れないで受診してください。あなたの健康と生まれてくる子どものためにも、妊娠中に最低4回の健診を受けましょう」。

プロジェクトが始まって以来、保健所を訪れる妊娠婦が大幅に増え、医療サービスを提供する側も驚きの色を隠せません。「正直に告白しますが、これまでのフィールドワークで診た妊産婦はせいぜい5人でした。プロジェクトが始まってからもう45人以上も診ています。男性への意識啓発も進んだおかげで、夫婦で訪れるケースも増え、積極的にHIV検査を受ける人がでてきました」（アイッシさん、保健所所長）。

仕事をもっている女性も活躍しています。地域ボランティアでヘアサロンを経営するエリカさんは、お客さんや通行人の目に触れるように、店に産前健診の重要性を訴える啓発ポスターを貼っています。ときにはお客さんと白熱した議論をすることも。また、仕事の合間に妊娠している女性の自宅を訪れ、保健所で受診するよう働きかけています。

保健所で座って待っているだけでは受診者は増えません。こちらからフィールドに出て行き、受診が必要な人を可能な限り多く掘り起こす必要があります。頻繁に行う意識啓発キャンペーンや自宅訪問もその一環です。“地道に足で稼ぐ活動と情報通信サービスの融合”。革新的な取り組みは続きます。

“移動診療所”で妊産婦健診

あの子どもたちは今
エクアドル「働く子どもたち」

2013 年 10 月まで 3 年以上にわたって実施したこのプロジェクトでは、
働く子どもたちが劣悪な労働から抜け出し、
教育を受けられるようにさまざまな活動を行いました。
そのプロジェクトに参加した一人の男の子のストーリーをご紹介します。

実施期間	2010 年 4 月～ 2013 年 10 月（終了）
実施地域	首都キト市内サンロケ地区
対象	キトに移住してきた先住民族の子どもたち約 2,400 人
主な活動内容	● 子どもへの教育支援、奨学金支給
	● 子ども対象のソーシャルスキルトレーニング
	● レクリエーション活動
	● 保護者トレーニング、家庭訪問など

学校への不適応から“働く子ども”へ…。職業トレーニングを通して自分への誇りを手にしました

ホセさん（仮名・14 歳）

トレーニング中のホセさん

エクアドルの首都・キト市の旧市街にあるサンロケ市場は、午前２時からじゃがいもの袋や魚を乗せたトラックが到着し始め、活気に溢れます。ここでは、多くの子どもたちが荷物運びや靴磨き、皮むき、物売り、ゴミ集めなどの仕事で一日８時間以上働いています。働いている子どもは、さまざまな事情を抱えています。

学校で孤立し、中途退学。母親の薦めでプロジェクトに参加

14 歳のホセ（仮名）は、市場に近く、最も治安が悪い地域の狭い家で、母親と継父、３人の妹と一緒に暮らしていました。一家の“長男”として大事に育てられましたが、成長し、学校に入学したところで問題が起こりました。学校生活に適応できなかったのです。クラスメートや先生とコミュニケーションがとれず、１人でいることがほとんど。やがて学校を中途退学し、市場で働くようになりました。市場でも休憩時間はいつも１人でした。

そんなときに出会ったのがこの教育プログラムです。ホセを心配した母親のすすめで、このプログラムに参加することになりました。

しかし、簡単にことが運んだわけではありません。サポートしてくれた心理学者は、最初にホセに会った時の印象をこう述べました。「明らかにホセには専門的な助けが必要でした。お母さんは、ホセが小学校を卒業できるように支援が欲しいと必死で訴えましたが、ホセの様子を見て、私たちはまずホセにいちばん合っているのは職業訓練だろうと考えました。ただし、市場での仕事ではなく、レストランや縫製、理容などの仕事で１年間トレーニングを受けるように薦めたのです」

興味のある仕事を続けることで責任をもってやり抜く力が身につく

ホセの希望は、レストランでのトレーニングでした。調理や給仕の仕事に強い関心を示したのです。「周囲とトラブルも起こさず、責任をもってやり通した」と、ホセを担当した教育アドバイザー。調理の先生は、「私が教えた中で一番の生徒。模範生です」とホセを称えました。「特にデザート作りに熱中し、よく家族のためにもって帰っていた」と振り返ります。１年のトレーニングを終えたホセには、「レストランの助手として働いた」という職歴が与えられました。おかげで将来的にも有利になりましたが、いちばんの成果は、ホセが自分への誇りを手にしたことです。

ホセは現在、サンロケ市場を去り、他の場所で家族と暮らしています。そこで、中等教育の卒業資格をもらえる非公式教育を受けています。

「僕はいずれ大学にも行きたいと思っています。僕がいちばん大切に思うお母さん、そしてプロジェクトを通じて支えてくれたプランのおかげです」

このプロジェクトを通じて、学校に戻ったり、職業訓練を受けた多くの子どもたちがいます。一人ひとりの人生を変えるきっかけとなっています。

家族といっしょに

THANK YOU MESSAGES

～編集後記～

いつもあたたかいご支援をありがとうございます。
今期もさまざまな国の子どもたちへ支援の手が届き、
成果をあげることができました。
活動国のメンバーや、
プロジェクト参加者からの感謝のメッセージです。

参加者　子どもクラブのメンバーの男の子（トーゴ）

サマーキャンプに参加して、障がいのある人たちへの理解を深めることができました。これから、自分の周りの人たちに伝えたいことがたくさんあります！ 楽しいキャンプを企画してくれたプランに感謝しています！

障がいのある子どもたちの支援体制作り（トーゴ）

プロジェクトコーディネーター　ナカさん

2011 年にこのプロジェクトが始まってから、日本のマンスリー・サポーターのみなさんのおかげで、これまでにたくさんの障がいのある子どもを発見し、適切な治療とケアを行うことができました。皆さまのあたたかいご支援は、多くの障がいのある子どもたちとその家族に幸せと希望を与えてくださっています。心から感謝申し上げます。

参加者　カメルーンの妊産婦　ヴォーさん

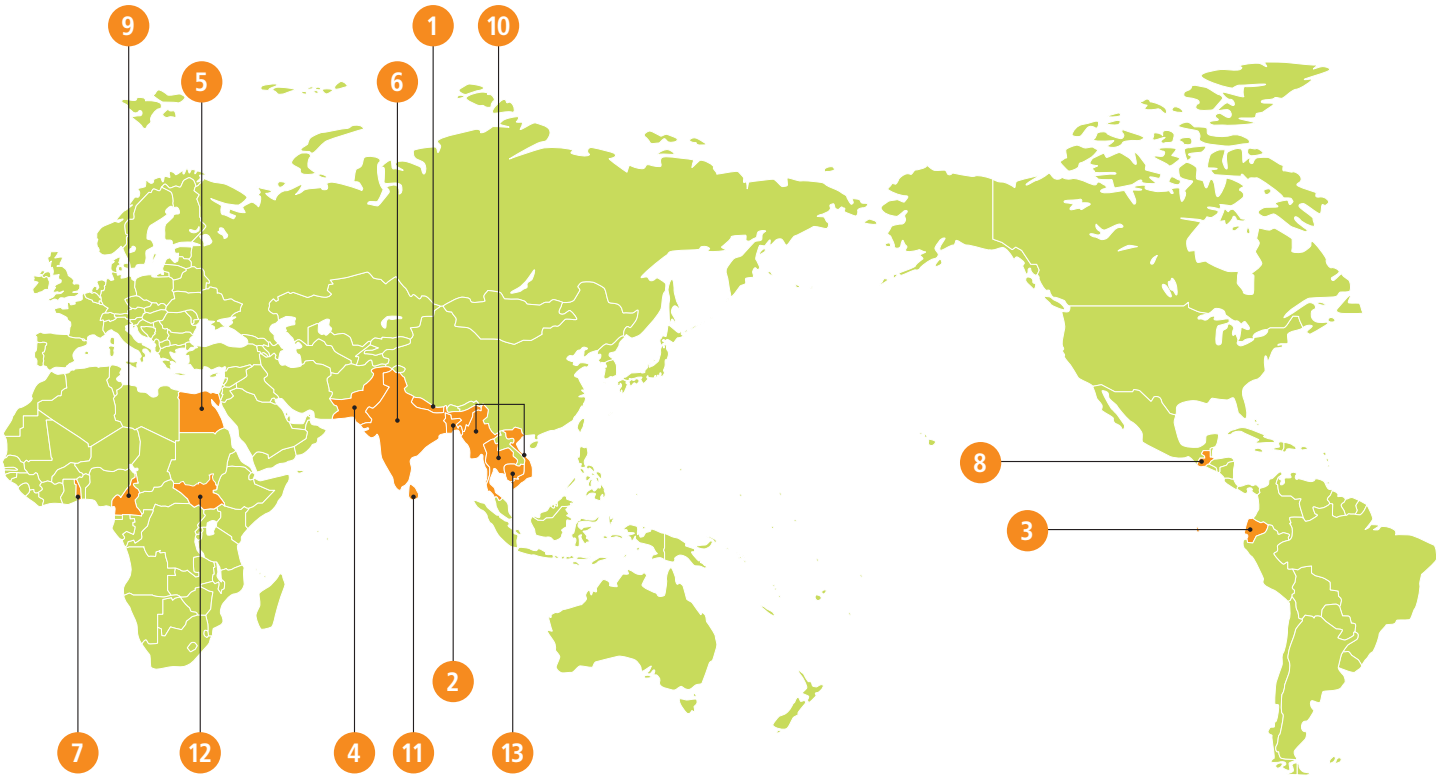
昨日は一日農作業をしていて疲れたので、「明日は保健所に行きたくないな」と思っていました。でも携帯電話でメッセージを受け取ったとき、「やはりお腹の子どものためにも行かなければ」と思い直し、夫も「行きなさい」というので、今朝、健診に来ました。SMS サービスは妊産婦を勇気づけてくれるツールです。プランさん、ありがとう。このサービスを、ぜひ他の地域でも普及させてください。

エジプトのストリート・チルドレンのプロジェクト担当　モハメッドさん

エジプトのストリート・チルドレンは、家族離散、貧困、虐待、搾取、暴力、病気など多くの問題を抱えています。ときにはこうした問題を抱えきれず、犯罪に走ったりするため、地域ではこうした問題の「被害者」というより地域での問題児という目で見られてしまいます。今、プロジェクトの中盤を迎えていますが、これまで 2000 人以上の子どもたちを支援し、確実な成果を出しています。これからも法的支援や、特に子どものいる女性への支援など、新しい側面からストリート・チルドレンの問題に包括的に取り組んでいきます。このプロジェクトを可能にしてくださるのは、皆さんのあたたかいご支援です。心から御礼申し上げます。

プラン・マンスリー・サポーター　プロジェクト一覧

※本報告書は 4 月と 10 月の年 2 回発行ですが、
この 2 回の報告書にて、すべてのプロジェクトをご紹介しています。



カテゴリー	国	プロジェクト名
ストリート・チルドレンと働く子どもたち	1 ネパール	働く子どもたち
	2 バングラデシュ	ストリート・チルドレン
	3 エクアドル	働く子どもたち
	4 パキスタン	家事使用人として働く女の子への教育・就業支援
	5 エジプト	ストリート・チルドレン
障がいのある子どもたち	6 インド	障がいのある子どもたち
	7 トーゴ	障がいのある子どもたちの支援体制づくり
	8 グアテマラ	障がいのある子どもたちの支援体制づくり
HIV とエイズに苦しむ子どもたち	6 インド	子どもと女性を中心とした HIV 予防とケア
	9 カメルーン	子どもと女性を中心とした HIV 予防とケア
紛争や災害に巻き込まれる子どもたち	10 アジア 3 カ国［ミャンマー / ベトナム / タイ］	ASEAN「災害に強い学校」イニシアチブ
	11 スリランカ	子どもの保護とケア及び地域社会への復帰支援
	12 南スーダン	若者への就職・起業支援
	13 カンボジア	学校給食を通した子どもの栄養改善
虐待される子どもたち	11 スリランカ	家庭・学校・地域での暴力防止
	2 バングラデシュ	子どもの虐待防止
	9 カメルーン	弱い立場にある子どもの支援と保護

ご質問やご意見などございましたら、下記担当までご連絡ください。

公益財団法人プラン・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL 03-5481-6100　FAX 03-5481-6200　www.plan-japan.org

Plan プラン・ジャパン